

伊谷純一郎生誕百年記念事業 公開シンポジウム

霊長類学と生態人類学、 アフリカ地域研究の創成と展開

自然の探究者 伊谷純一郎

開会あいさつ：山極壽一（総合地球環境学研究所）

趣旨説明・司会：太田至（京都大学）

話題提供：中村美知夫（京都大学）、河合香吏（東京外国語大学）、
市川光雄（京都大学）、高畑由起夫（関西学院大学）

コメント：足立薫（京都産業大学）、安岡宏和（京都大学）、
河辺俊雄（高崎経済大学）、本郷峻（総合地球環境学研究所／
京都大学）

閉会あいさつ：篠原徹

2026年12月5日(土)13:00～17:00

場所：京都大学稲盛財団記念館 3階大会議室

参加費無料・事前申し込み不要



霊長類学と生態人類学、アフリカ地域研究の創成と展開

趣旨説明

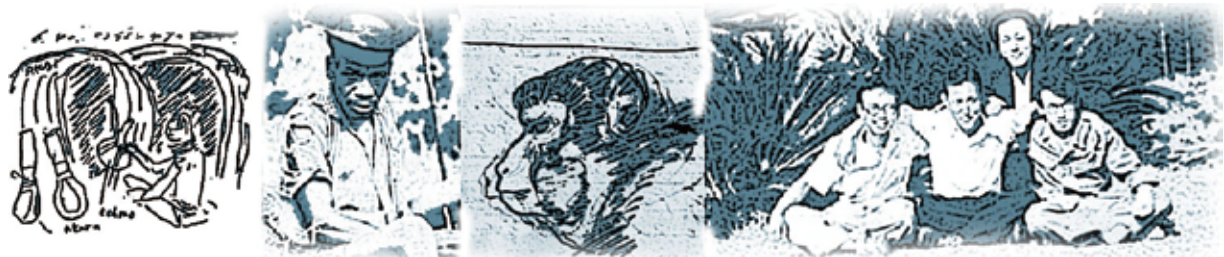
2026 年は、この国の霊長類学と生態人類学、アフリカ地域研究の創成に大きな役割を果たした伊谷純一郎の生誕 100 年にあたります。本シンポジウムは、この節目を機に伊谷の業績と足跡を振り返るとともに、それらが現在の研究にどのような形で受け継がれ、展開してきたのかを改めて考えることを目的として企画されたものです。

伊谷純一郎は、日本における霊長類学を創成し、さらに生態人類学およびアフリカ地域研究を生み育てて牽引し、フィールドワークを基盤とする学問のあり方を具体的なフィールド実践を通して示した研究者です。そのフィールド科学としての特徴は、長期にわたる継続的な定点調査 (intensive survey) と広域的な視野をもった調査 (extensive survey) のいずれをも必須としたこと、そして霊長類と人間—すべての研究対象—を理解すべき相手として尊敬する姿勢をとり続けていたことにありました。こうした研究態度はその後の多くの研究者の実践を通して継承され、日本のフィールド科学の重要な基盤を形づくってきたといっていよいでしょう。

しかし、生誕 100 年という節目に問われるべきは、伊谷の業績を歴史的に評価することだけではありません。むしろ、現在の研究環境や学問状況の中で、伊谷が提示したフィールド科学の方法や姿勢がどのような意味を持ち続けているのかを問い直すことに、本シンポジウムの意義があります。長期フィールドワークの継続が困難になりつつある研究環境、研究対象や研究方法の多様化ないし極端な一元化、分野横断的・学際的研究の展開とその曖昧さといったさまざまな今日的な学問状況の中で、フィールドに立つとは何を意味するのかという問いは、改めて検討されてしかるべきでしょう。

本企画では、霊長類学、生態人類学、アフリカ地域研究それぞれの立場から研究を進めてきた研究者が登壇し、現在の関心や到達点を提示するとともに、伊谷の研究がどのような問いを残し、またそれがどのように展開されているのかを議論します。分野ごとの成果紹介にとどまることなく、異なる研究対象や方法がどのように比較可能となりうるのか、また研究対象との関係性をどのように捉え直すことができるのかを共有することを目指します。

さらに本企画では、伊谷を直接知る世代と、その業績を歴史として受け取る世代が同じ場で議論することにも意義を見出したいと考えます。学問の継承とは、知識の伝達にとどまるものではなく、問いの立て方や研究への向き合い方がどのように変化しながら受け継がれてゆくのかという過程そのものに関わるからです。本シンポジウムが、伊谷純一郎という存在を媒介として、現在私たちが実践する研究を自省しつつ、未来へ向けた新たな対話を始める契機となることを期待します。



【主催】伊谷純一郎生誕百年記念事業 組織委員会

【後援】日本霊長類学会、生態人類学会、日本アフリカ学会、京都大学 大学院理学研究科、京都大学 大学院理学研究科 自然人類学研究室、京都大学 大学院理学研究科 人類進化論研究室、京都大学 大学院理学研究科 霊長類フィールド研究センター、京都大学 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (ASAFAS)、京都大学 アフリカ地域研究資料センター

【協力】公益財団法人 日本モンキーセンター、野外民族博物館リトルワールド、東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 基幹研究人類学、東京外国語大学 現代アフリカ地域研究センター

【助成金】一般社団法人 東京倶楽部

【謝辞】本事業を企画・実施するための主たる資金は、有志の方々からのご寄付および助成金によってまかなっています。資金を提供していただいた方々に、あらためて厚く御礼申し上げます。